
高機動幻想ガンパレードマーチ絶望の中の希望

ゲイジ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

高機動幻想ガンパレードマーチ絶望の中の希望

【Nコード】

N8270P

【作者名】

ゲイジ

【あらすじ】

1945年、第二次世界大戦中に突如として黒い月が出現する。

それと同時に、後に「幻獣」と呼ばれるようになる謎の生命体が人類に襲い掛かった。

意外な形で大戦は終結し、同時に幻獣に対して人類は共同戦線を張ることを余儀なくされた。

それからおよそ50年、中国での焦土作戦失敗とともにユーラシア大陸から追い立てられた人類の存在できる地域は、南北アメリカと南アフリカの一部、そして日本のみとなっていた。

1997年9月、幻獣がついに九州に上陸、1998年、八代平原会戦において日本を守る自衛軍は壊滅的敗北を喫する。

1999年、熊本を要塞化、これを中心とした防衛ラインを急遽構築、本州防衛のための正規軍を整えるための時間稼ぎとして、それまで徴兵年齢に達していなかった14歳から17歳までの少年少女達を学兵として強制召集し、彼らを中心とした急造の部隊を熊本要塞に配置する。

彼らはほとんどが銃を持った事も無いような子供たちであり、多くが本土防衛のための捨て駒として戦死するだろうと多くの人々が考えていた。

果たして世界は、破滅するのか、それとも希望は残されているのか、

始まります。

第一話（前書き）

スーパーロボット大戦OG攻略の主人公があらたに挑む世界。

どうぞ。

第一話

「久しぶりだなダイチ」

誰？

「忘れたかい」

解らない。

それに俺の名前はダイチなのか。

「君はまた、新しい世界に向かって貰う」

新しい世界！？

なら今まで生きていた世界は！？

「新たな世界で、破滅に向かってる世界を救ってくれ」

人話は聞こうよ！！

だけどまあ……。助けを求められて断ったら誓いに背くな。

『助からない！ 違っただろ！！ 助けてほしい！ それも違う！
！ 絶望的意味の言葉をいうな！！ お前一言こつ言えればいい！！
『助けて！』俺はその言葉に全力で答える！！！！』

頭の中でこの言葉だけは、忘れなかった。

「いいぜ。破滅なんて運命ぶつつぶしてやるよ」

「君は代わらないね」

「それでどうすればいい」

「目を閉じて。」

次に目を覚ました時に、君の新しい世界が始まる」

そこで意識が無くなる

「すまない。そして頼んだよ」

第一話（後書き）

基本はあちらを優先します。ストーリーに息詰まったら、書きま
す。

今後ともよろしくお願いします。

キャラクター紹介（前書き）

最低限のキャラクター設定です。

どうぞ

キャラクター紹介

第3124小隊（だいさんりょだん、だいいちだいたい、だいにちゅうたいきか、だいよんしょうたい）代表メンバー

主人公 矢萩^{やはぎ} 大地^{だいち}

年齢 17歳

生別 男

階級 十翼長

楽観的考えの持ち主友人からの頼みを断れない。

良く言えばお人よし、悪く言えばパシリ。

金運が無くお金の関わる賭け事の勝率はほぼ0。

代わりに悪運、賭け事（お金が関わらない）その他についてはかなり運が良い。

兵科 戦車兵、突撃兵

石川^{いしかわ}慎也^{しんや}

年齢 17歳

生別 男

階級 十翼長

よく大地を振り回す。

遊ぶ事が大好きで勉強嫌い。

だが、テストの点数は平均的。

軽く気さくな性格である。

しかしこの性格は過去のイジメからくるもので、それを克服するために頑張った成果である

現在イジメをしていた奴とも和解し友情を深めている。別の隊にも友人が多い。

故に友人を無くす事が多く悲しみが絶えない。

兵科 偵察兵

水瀬みなせ 詩織しおり

年齢 17

生別 女

階級 十翼長

スーパーロボット大戦OG攻略よりゲスト参戦である。

基本的におてんばでよく大地達と一緒にいる。

天才で何事もそつなくこなすが、どこかで、抜ける事があり、フ
ォローするのは、もっぱら大地である。

兵科 戦車兵 偵察兵

はせへ
長谷部 静 しずか

年齢 18

生別 女

階級 百翼長

皆を優しく見守るお姉さんの存在。

よき相談役。

親を早くに亡くしており兄弟姉妹を養う為に軍に入る。

誰かが悲しい思いをしていると優しく抱きしめる。

家事全般をそつなく熟す。

兵科 衛生兵 事務官

芝村葵
しばむらあおい

年齢 19

性格 女

階級 万翼長

冷静、沈着、だが、誰よりも隊の事を考えている。

芝村故に、隊員から良い印象を持たれてない。

隊存続の為なら何でも辞さない覚悟も持っている。

兵科 司令官 砲撃兵

ルースファリア・ロイサンドロ

年齢 17

性格 女

階級 百翼長

無口、無愛想、無表情、決して誰にも、心を開こうとしない。

よく一人でいる。

一人でいる事を邪魔する奴には、徹底的毒舌になり、ひたすら罵声を言い、相手が謝るまで陥れる。

中でも矢萩 大地が一番嫌いである。

兵科 狙撃兵

ロン・ウェンリー

年齢 22歳

生別 男

階級 千翼長

隊の中で唯一士官学校を卒業しており、ユーラシア戦線の生き残り。

自分の部隊を生き残らせる為に、芝村と契約している。

したがって、芝村 葵を補佐するために配属された。
したがって、芝村 葵を補佐するために配属された。
補佐官として、堅実な作戦を立てるが、頭の中では全く違う作戦
を考えている。

コーヒーを出すと直ぐに紅茶に入れ直す。

兵科 狙撃兵、参謀補佐官

千藤^{せんだう} 維新^{いしん}

年齢 21

生別 男

階級 戦士

ロン・ウェンリー隊から引き抜かれた。

ロンが面倒くさがりで隊育成の為につれてきた熱血教官。

隊員全員から、恐怖の対象。

兵科 突撃兵

その他戦闘員7名

神崎^{かんだき} 幸一^{こういち}

年齢 21

生別 男

階級 千翼長

開発が好きで、一番好きな台詞は『こんな事あるうと用意していたのが○○』である。

何時か言いたいと考えている。

天才的な整備技術で、5121小隊の整備部隊にスカウトされたが、原素子はら もとこがいるから、いる必要性がないとのことで、拒否した経歴をもつ。

整備に関しては完璧思考を持っているが、それ以外は駄目人間で整備副主任に文句を言われるのが日課である

兵科 整備主任 整備兵

柴崎しばざき 花梨かりん

年齢 18

生別 女

階級 百翼長

しっかりもので、神崎の後輩にあたる。

整備技術は、隊ナンバー2の秀才。

また神崎の生活面をひたすらフォローし続けている。

兵科 整備副主任 整備兵

以下整備兵4名

キャラクター紹介（後書き）

感想、指摘、評価、お願いします。

第二話（前書き）

明けましておめでとございます。

年があけて、初投稿こちらでしたね。

あちらは、現在ゲームの攻略が進んでいないため、投稿出来てません、クリア次第投稿します。

どうぞ。

第二話

第七世界より第五世界への介入者を確認。

現在第五世界は、滅びへと向かってあゆんでいる。

そのような世界において。

それは希望となって皆を導く光となるか。

何もできずただ消えるか。

運命はまだ解らない。

.....
現状報告。

現在我々人類は、幻獣による侵略を受けている。

圧倒的物量の前に人類は、防衛戦を余儀なくされている。

現在人類の生存圏は、日本、アメリカ、南アフリカの三ヶ所のみとなった。

奇跡が起きない限り、人類は、恐らく勝つ事は出来ないだろう。

昨日まで共に戦っていた戦友は、次の日にはいない。

次は自分という恐怖と戦いながら、幻獣と戦う。

生き残るために……。

そこから先は血により字が霞み読み取る事ができない。

戦死した学兵の日誌最後のページより。

.....

介入者視点開始

何だろう。

頭の中が真っ白だ。

俺はどうなったんだ。

いや俺？

俺って誰だ？

名前は？ えーと思い出せない。

何処にすんでいる？

知らない。

何をしていた？

忘れた。

自問自答してみたが、何も覚えてない。

また記憶喪失か。

いやまて！！ 自分で言うのも何だが、またって何だ！？

あー何だ。何か面倒くさいな。

いいや別に、そんなもん後から解るから。

何か煩いな。

銃声！？

それにこの匂い……血か。

そこで意識を取り戻す。

.....

「此処は、いつたい？」

周りを見渡すと誰か倒れていた！！

まだ若い青年だか、出血が酷く恐らくは助からないだろう。

口元が微かに動く。

耳をすます。

「……か、かあ……さん……ごめ……ん……かえ……れそうに……
ないわ。ごめん」

「!？」

そういつと青年は、静かに息をひきとった。

何だよこれは、何でこんな若い奴が死なないといけないんだよ!!

軍隊とかないのかよ!!

俺はその青年に気を取られていた為に後ろからの侵入者に気付かず。

……肩から血が飛んだ。

「ガアアア!？」

振り向くと斧みたいな物を持った怪物が立っていた。

何だよコイツは!?

これが大地と幻獣との最初の遭遇である。

「ちっ!?!」

怪物は何のためらいも無く武器を振り回してくる。

このままじゃじり貧だな。

何か武器になりそうなものは、ないか。

そこで先程の青年が銃を持っていた事を思い出す。

「すまない」

青年に謝りながら武器を手にする。

そして……。

怪物目掛けて打った。

はずだった。

弾がでない。

正確には弾切れなのだ。

「! ? くう ! ?」

紙一重で怪物の攻撃をかわすが、正直辛い。

何回か、攻撃をかわすが、その内仲間を呼んだのか、数が増えだす。

そして遂に……

「しまった ! ?」

背中に木が当たる。

囲まれたのである。

怪物が斧を振り上げる。

やられる ! ? 咄嗟に目をつむる。

……あれ。いつまでも衝撃が、こない。

恐る恐る目を開けると。

攻撃を加えようとしていた怪物は消えていた。

「そこの貴様 ! ! こちらに走れるか ! ! いや走れ ! !」

突然声がする

女性のものだが、随分と酷いものいいだ。

周りを見ると、手を振っているのが見えた。

俺は、痛む肩を我慢しながら、全力で走った。

銃声が聞こえ、怪物達が消え去っていく。

まるで、そこに最初から、居なかったかのように。

「きたか！！ 貴様！！ ウォードレスはどうした！！」

「ウォードレス？ 何だよそれ」

「ウォードレスを知らない？ まあよい。詮索は、後だ！！」

直ぐにこの場を離れる」

「あの怪物どもは、どうするんだ」

あんなのほつといたら、他にも被害がでるんじゃないか。

「怪物とは、幻獣のことか？」

幻獣？ それが怪物の名前か？

「まあ、よい。今は逃げる事だけ考えよ。

芝村としては、逃げる事など有り得ぬのだが、ゴブリンごときと
刺し違える気などない」

そういうと芝村？　は、何かのピンを抜いてゴブリン？　に投げつけた。

凄い爆風が起きる

「走れ！！」

「またかよ！？」

芝村？　と俺は、全力で走り始める。

つつか何でそんなに速いんだよ！！

芝村？　との距離が少し開く。

前方で爆発が起きる。

「ちっ！！ミノタウロスまできたか。」

ミノタウロスって何だよ。

「芝村さんこちらです」

爆発したところより奥から声が聞こえた。

「ロンか！？　だかゴブリンとミノタウロスが後方にいるぞ」

「大丈夫ですよ。芝村さん。ゴブにミノ、いつもの事ですよ。」

既に敵はこちらの罠に嵌まったアリ地獄のアリですよ。」

「そうか。後を任せる」

「了解しました。では後ほど」

「ゆくぞ」

芝村は、歩き進んでいく。

後ろをついていく。

「お、おい。いいのかよ。あいつ置いていって大丈夫なのか」

「奴は戦術において天才だ。本人が大丈夫といったのだから大丈夫だ。」

「さて着いたぞ」

そこには基地というには、突貫的な場所が、あった。

この世界においての介入者として、絶望との戦いの運命はこうして始まった。

第二話（後書き）

感想、指摘、評価、お願いします。

第三話（前書き）

シリアス難しいですね。

どうぞ

第三話

ロン視点開始

はてさて、芝村さんには軽く勝つみたいに言ってしまいましたが、まあ給料分と契約分くらいの仕事は、頑張りますかね。

しかし芝村さんも、面倒事に巻き込まれるのがお好きなようですね。

何処に出かけると必ず厄介事にあわれますね。

今回のあの少年は、一体どんな影響を与えることやら解りませんね。

「ロンさん。敵さんがきました」

来ましたか。来なくともいいのですがね。

むしろ来るな。その方が楽で済みますからね。

「前方よりゴブリン多数来ます!!」

ゴブですかね。

幻獣とは、本当に面倒な敵ですね。

6属12科の体型に分類されている幻獣の中で一番弱いですがね。

ゴブリン（鳥脚属 走鳥科）

小型幻獣。身長1m、体重24kg、一つ目でいびつな人型をしている。

飛び道具は持たず、軽快な運動性能と数を頼りに攻撃してくる。

一体一体はそう強くないが、とにかく数が多い。

戦は数で勝敗が決まるのですがね。

まさにその通りですね。

こちらは人の数が有限、戦車など兵器も有限、武器である銃も有限、その銃弾ですら有限ですね。

対して幻獣は数のうえでは、無限に等しいですからね。

人類は、いつになったら、負けるという現実から、目を背けるの止めるでしょうかね。

人類に残された道は、恐らく、戦略レベルでは、もう勝つのは不可能でしょうね。

出来る事は、戦術レベルでの局地的勝利くらいでしょうかね。

まあ全戦全勝なら戦略性も出てきますがね。

戦術レベルでの行動しか取れない時点で全戦全勝などありえませんがね。

究極的にこの状況を逆転させる方法もありますね。

しかし、それが出来るなら、苦戦なんてしませんかね。

「ロンさんそろそろ指示してくれないとヤバいんですが!？」

「まだ敵は遠いと思いませんか。私としては、敵を倒すなら、もっとも効率的に倒した方が、楽だと思っんですよね」

霞と言うものは、敵が勝ったと思った時に、発動するのが、一番楽しいものですからね。

たまには、幻獣にも痛い目に合って頂かないと、今後の戦いが、つまりませんからね。

「それに、私は死ぬ時は老衰と決めてますからね」

「聞いてませんよ。そんなこと。」

「さて、無駄話は此処までにして、そろそろ反撃と参りましょうかね」

私が手を上げるのを見て全隊員が銃を構える。

「撃て!!!」

手を降ろしながらいう。

一斉に銃声がこだまし、ゴブを撃ち貫く。

いいですね。

敵に壊滅的打撃を与えたところで、本命がきましたかね。

「ロンさん。ミノタウロスが来ます」

ミノタウロス（鳥脚属 擬竜科）

中型幻獣。ゴルゴーンの進化系。

士魂号に対抗するために登場した幻獣で、二本足で歩く。

ボデイからの生体ミサイルの他、接近戦で使うパンチは非常に危険。耐久力も高い。

ゴルゴーン（鳥脚属 擬竜科）

中型幻獣。四脚獣のような姿をしている。

背中から生体ロケットを発射する。

移動速度はそこそ速く、それを活かした体当たりも行う。耐久力も高い。

ミノですか。面倒ですね。

奴一体にどれだけの将兵が、遣られたことかね。

「ミサイルネズミの準備は、どうですかね」

「できてます」

「そうですか。では奴のお腹に向けて撃つように伝えて下さいね
タイミングはこちらに合わせるようにね」

ミノ耐久性に優れていますが、生体ミサイルとして寄生している
ですね。

バカという幻獣の耐久性は高くないですからね。

バカ（外骨格属 装甲科）

寄生型幻獣。ミノタウロスに寄生し、生体ミサイルとして機能する。
対象に飛びついて自爆する事で攻撃する。

バカの周りはミノの装甲の中でも比較的柔らかいですから、数少
ない弱点でしょうね。

まあ普通は狙いませんがね。

狙いを定めている内にやられる可能性の方が高いですからね。

ミノが体を震わす。

どうやら生体ミサイルを撃とうとしていますね。

「今ですね！！ 撃て！！」

一斉にミサイルがミノの腹に寄生しているバカに向けて放たれる。

ミノが倒れる。

「では皆さん撤退……「大変です！？ ロンさん」どうかしめたかね」

「スキュラときたかぜを確認しました！？」

スキュラ（外骨格属 浮殻科）

中型幻獣。30mほどの長い尻尾を持つ飛行船のような身体に、小型幻獣が多数寄生している。

それらが一斉に放つレーザーは非常に強力である。

耐久力も非常に高いが、移動速度は遅い。

きたかぜゾンビ（非骨格群体属 寄生科）

中型幻獣。「きたかぜ」の残骸に幻獣が寄生した姿。

ミサイルなどで攻撃してくる。移動速度が速く、突出しがち。

装甲も薄く撃墜しやすい。

「どの道撤退します」

全くついてませんね。

これは何人か戦死者が出ますかね。

ロン達は急ぎ撤退を開始したが、数名が帰らなかった。

「スキュラ、きたかぜは、流石にきついですね」

出来れば二度と会いたくありません。

何人が戦死させてしまいましたから、芝村さんになんていいましようかね。

気が思いですね。

第三話（後書き）

感想、評価、指摘、お待ちしております。

第四話（前書き）

才能が欲しいですね

どうぞ

第四話

主人公視点開始

此処は、おそらくは、芝村とさつき会った奴が造った基地なんだろう。

しかし誰もいないな。かなり無用心じゃないか？

芝村が振り向く。

「さて、では、話してもらおう。何故貴様は、戦場においてウォードレスも着ずにいた」

尋問か。

まあ、確かに怪しいもんな。

「取り合えず、自己紹介しませんか。説明するにしても、まずは、相手の事を知りませんと」

「そうだな。3124小隊中隊長、芝村 葵だ。

芝村をしている。」

芝村を強調しているけど、何か意味あるのか？

……そして隊長が、部隊離れて、何をしていたんだ？

「……矢萩 大地。民間人？ ……すみません。

後は、覚えていません。」

いやー。このままだと不審者確定ですね。

しかし何も覚えていないから、どうしろうと。

「……ふざけているのか！！」

あー。切れてます。

解ります。解りますとも、そんなの言ってる自分が一番解ってます。

だがしかし、俺にどうしろうと、記憶喪失なんだから、しょうがないだろ。

「だんまりか、貴様を、幻獣共生派として、処刑することも可能だか」

いきなり処刑宣言かよ！？

何様だよ！！

「記憶喪失で名前以外何も覚えてないんだ！！」

首筋に銃口が押し付けられる。

冷や汗が、こんなに出るの、いつிரいかな。

「嘘をつくなら、もっとマシな嘘をつくでしょ」

「確かにそうだ。だが演技という可能性もある」

「どうやって記憶喪失を証明すりゃいいんだよ!!」

「積みか？ 積みなのか?! このまま訳も分からず処刑されるのか!？」

「心配するな。」

「痛みも感じぬまに死んでいる」

「介入者の死亡により、物語りを終了します。」

「死んでたまるか!？」

「俺は素早くしゃがみ、首筋から銃口を外すと、相手の溝に肘打ち」

を入れる。

「ぐ！？」

芝村は倒れ込む。

俺は急いで銃を蹴り飛ばした。

はー。これで死ななくてすむ。

「殺せ。」

はっ？

「殺せ！！ 私は、負けたのだ。」

芝村に負けは許されない。

負けは、死を意味する。

だから、速く殺せ！！！！」

いや。落ち着こうよ。

別にあんた殺したって何も意味ない。

だけれど俺は困る。

「殺すわけないだろ」

「私に生き恥をさらせと言っのか！！」

「いや。あんたに死なれたら、こっちが困る。」

こんな戦場の中でどうやって生きろと言っんだよ」

「すきにすればいい。」

どうせ私など、落ちこぼれ、芝村を名乗る資格などないのだ」

おい。芝村さん戻ってきてくれ。」

「はっ！？ すまない。」

取り乱してしまったようだな」

「構いませんが、何があっただんですか？」

「こんな話恥ずかしいが、私は、芝村を名乗っているが、実戦において敗北が多い。」

訓練では、冷静な判断が、でくるのだかな」

「原因は、解りますか」

「死だな」

「し？ しとは、死ぬのですか」

「うむ。死は、全てを無にする。」

きつとそれに耐えられないでいるのだろう」

「ならさ……。」

「うん？」

『誰も死なない部隊を作ればいいんじゃないか』

「何をいつて……。理想論だ。」

そんなことできわしない」

最初から諦めるくらいなら、最後まで足掻いたのかな。

「理想論というなら、作った事があるんだな。自分で絶対負けな
い部隊をな」

「不可能だ。」

お前は記憶喪失だと言ったな。

なら、幻獣の恐ろしさを知らないから、言えるのだ」

幻獣ってそんなに強いのか。

俺自身そんなに見たわけじゃないから解らないけど

「おやおや、何のお話ですかね」

さっきの男が、いきなり現れた。ウォードレスだったか？ が、ボロボロだな。

「ロン無事だったか！！」

「残念ながら無事とは、言えませんね。」

あの後ゴブとミノは倒したのですが、スキュラときたかぜに遭遇しましてね。

部隊はほぼ壊滅ですね。

生き残ったのは、私と千藤君だけです。

本当に申し訳ございません」

壊滅！？

「……スキュラときたかぜか。これが、現実だ。

絶対戦死しないなどありえないのだ」

「戦死者がいない部隊ならありますけどね」

「！？ 有るのか、そんな部隊が」

芝村は驚きが隠せないようだ。

「ええ。5121小隊。」

正式名称は第5連隊第1大隊第2中隊旗下第1小隊。

対中型幻獣駆逐戦車隊。

確か芝村姫ぎみの一人がいると聞いてますね」

「舞か。あいつは、強いからな。そして脆い。」

あいつの脆さをフォローし、強さを引き立てる仲間を手に入れたか」

「なんだ。手本が、有るじゃないですか」

「いや。しかし……」

「無理と決め付けるのは、芝村らしくありませんね」

「ロン……。出来るだろうか、私に」

「何も貴方一人で、やる必要は無いでしょうね。」

幸い手伝ってくれそうな人材が少なくともこの場3人いますからね」

すいませんロンさんでしたか。それ俺も入ってますよね。

「おや。まさか、言い出した貴方が、見知らぬフリをするつもりですかね」

何か自分の言葉には、最後まで責任を取ってことですか？

「いや。俺は……」

「期待してますね」

「……はい」

あの笑顔が、怖い。

早まったかな？

「では早速捜しに行きましょうかね。」

では、千藤君道を開いて下さい。幻獣に囲まれる前に」

「……任せろ」

ここにきて初めて喋ったな。この人。

「……解った。捜してみよう。絶対戦死しない仲間を見つけるために」

新しく仲間を捜す為に戦場を後にした。

第四話（後書き）

感想、指摘、評価、お願いします

仲間捜し編第一話（前書き）

どうぞ。

仲間捜し編第一話

仲間捜しの為にまずやらなくては、ならない事がある。

ロンが、言うには、まず、どんな人材がいるか、を確認しなければならぬ。

次にその中で、芝村以外の派閥に、属している人間を除外しなければならぬ。

理由としては、他の派閥の人間がいた場合、芝村しか、知らない情報が、外部に漏れるのを防ぐため。

別に大丈夫だろうと思って聞いてみたら、その場にいた全員から、白い目で見られて、芝村から。

『芝村には、知られては、ならない情報が沢山ある。』

貴様が、もし何かの拍子に話した場合、恐らくラボ行きが、待っているように。

そうなった場合は、もう二度と青空を見ることはないだろう』

とか言われた。

というかラボって何んですか！？

んな危険なところ日本に、有るんですか！？

さて少し取り乱しましたが、話しを進めよう。

派閥の除外を終えたら、次は、芝村^{しばむら} 勝吏^{しょうじ}に対しての事後処理および、部下捜しの許可を得なければならない。

これが、恐らく一番面倒だろう。

現在芝村はその説得の為に司令部に赴いている。

芝村 葵視点開始

現在私は、自分達が考えた『絶対戦死しない部隊』を結成の為に、芝村 勝吏との会談を求め、待っている。

正直かなり、辛い。

芝村 勝吏。芝村の中の芝村。幻獣に勝つ為なら、どんな事でもする男。

必要な駒に対しては、寛容的であり、不要になれば、容赦無く切り捨てる。

だが、私は、今までこの男の信頼を裏切り続けた。

恐らく後は無いだろう。

全く同じ芝村なのに、こつも違つとはな。

「芝村 葵様。勝吏様がお会いになるそうですので、お入り下さ

い
」

ウイチタ（ういちた） 更紗勝吏さらしょうりの副官である。

「頑張りなさい。葵。」

それでも私は貴方の事嫌いじゃないわよ」

「え！？
」

ウイチタは、微笑んでいた。

私は。

「ありがとうございます」

と答えて勝吏のもとに向かった。

扉をノックする。

「芝村 葵です」

「入れ」

途端に緊張してきた。

「失礼します」

「失礼するなら帰れ」

「はい」

扉を閉める。

……すぐに扉を開く。

「なんだ。帰ったのでは、なかったのか」

「おふぎけは止してください」

「ほう。少しは、成長したか」

ロンを付けた価値はあったか」

一応敬礼する

この人は嫌いだ。いつも私をからかって笑う。

「さて本題だが、何しに来た」

！？ 急に威圧感が増。

「さっきのやり取りで、緊張は解けただろう。」

それで、何しに来た」

何が、『緊張が解けた』だ。

だがこの男を説得しなければ、明日はない。

「まず初めに、申し訳ありませんでした」

私は、芝村としてのプライドを捨て、土下座した。

「くくく。何の真似だ。貴様は、それでも芝村か？」

「芝村ではありますが、私は、土下座をしても足りない程の、血をまた流させました。」

ですが私は、そのもの達に対して死を持って償う事は、出来ません。

ならば、芝村が一番屈辱である土下座をしました」

実際芝村は、土下座など絶対しない。

土下座するくらいなら名誉の戦死か、消される。

「ふつ。それで許されると」

「芝村には、芝村の責任の取り方があります」

「責任の取り方が。なら、貴様の芝村とし、どうするのだ」

「勝ちます！！」

「すまん。何を言ったか聞こえなかった。」

もう一度言ってくれないか」

「幻獣と戦って勝つ事が、芝村の責任の取り方です」
すると勝吏は、大爆笑をしだした。

「あははは！ くっ！くるっ！ 苦しい。貴様は、俺を笑い殺しにする気か！！」

そんな事で死ぬなら、苦労はしないだろう。

「本気といいましたら」

「壊滅するのが解っているのに勝つか？」

笑いたければ笑えばいい。だが、こちらは、これがとつらなかつたら、待っているのは死だ。

「ならどうする。死が苦手な貴様が編成する部隊部隊だ。

まさか、誰も死なない部隊か？」

「はい。誰も死なない部隊を編成します」

これには、勝吏も少し驚いた様子だが、また直ぐに笑いだした。

「くくく。これは、貴様の案出はないな。

ロンか？ いや。奴は、馬鹿出はない。

こんな馬鹿下駄話だ。

俺が知らない間に、相当な大馬鹿が、貴様の下に付いたか。だがいいぞ。

俺は、馬鹿は嫌いだが、大馬鹿は、好きだぞ

いいぞ。予算を出してやろう。その馬鹿下駄話が、何処まで続くか、見届けてやる」

上手く言ったか

「正しだ。絶対条件として、編成した部隊から、一人でいい絢爛舞踏章を取らせろ」

な！？ 絢爛舞踏章……。あれは、人類が取得不可能と言われている。

「どうした。まさか無理とは、言わせないぞ。それに今すぐ取れとは、言わない気長に待ってやる」

「……解りました」

「即決出来なかったのが、マイナスだが、まあいい。他に話がないなら、部屋を退出しろ」

「はっ！！」

敬礼して部屋を出る。

肩の荷が無くなった。

芝村 葵視点 終了

芝村 勝吏視点 開始

くくく。善行といい。葵といい本当に俺を楽しませてくれる。

後は貴様次第だ。葵。今度こそ、俺の。いや。芝村の信頼を裏切るなよ。

芝村の信頼は、絶対だ。

次はないからな。

仲間捜し編第一話（後書き）

感想、指摘、評価、お願いします

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8270p/>

高機動幻想ガンパレードマーチ絶望の中の希望

2011年10月8日02時34分発行